

県中教研 音楽部会だより

第 41 号

発行日 令和8年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 柳原 薫
題 字 金山 泰仁 先生

「思いや意図」を大切にしたい授業づくりを

指導主事 三輪 憲治

「Uhー！が、なんか、よかった…」

これは、本年度研究大会（東部地区）での合唱曲「輝くために」の男声パート（主旋律）を引き立たせる女声パートのオブリガートの効果について聴き比べた際に聞かれたある生徒の発言です。授業者はその生徒の感じ方を大切に、思いの具体化を図ろうとしますが、その生徒は次の言葉をなかなか発することができませんでした。

この発言は、一見曖昧のように思えますが、音楽を通して心が確かに動いていることが受け取れます。理論的に説明できなくても、仲間とつくり上げた表現や全体の響きの中に、“何かいい”と感じ取る感覚的な心の動きが表れているのです。また、曲想や音楽の構造の変化等を聴き取り、音楽の“よさ”を心で捉えようとする感性を働かせている姿もいえます。

このように、音楽の“よさ”を感覚的に捉えた生徒の発言を受け止めた場合、「どんなふうによかった?」「どんな気持ちになった?」など、生徒の感覚を引き出すよう問い返すことで、その生徒の感性を言語化することができるかもしれません。また、再度の歌唱や聴き比べ、仲間との意見交流を通して、感じ取った“よさ”を全員で共有する場を設定することで、感性と思考を結び付けた音楽的理解を深めていくことも考えられます。

こうした活動を通して、生徒が感じた“よさ”を自分の言葉で伝え合い、“何となくいい”を“こうだからいい”へと発展させながら、自らの感性をもとに音楽を創造する力を育てていくことが大切です。そのために、一人一人の生活経験に基づいた具体的なイメージを大切にしながら、“こんなふうに表示したい”と願う生徒の「思いや意図」の実現に向けて、生徒に寄り添った丁寧な指導を今後も心がけていきたいと思いました。

（東部教育事務所）

授業改善のための「指導と評価の一体化」

部長 柳原 薫

昨年度、「『指導と評価の一体化』に向けた授業改善」に取り組んできましたが、形成的評価と総括的評価の区別が曖昧であったり、評価することに意識が偏り、評価の結果を授業改善に十分生かされていなかったりする課題がみられました。そこで本年度は、研究の副題を「授業改善のための『指導と評価の一体化』」とし、より深い研修を重ねながら取組を進めてきました。

研究大会の授業では、ねらいを明確にし、評価の場面を事前に丁寧に検討した上で実践が行われました。また、教師による評価だけでなく、自己評価や相互評価も取り入れ、生徒が自らの学びを実感し、その過程を振り返ることができる工夫もみられました。どの授業においても、生徒が自分の思いや意図をもって音楽活動に取り組む姿があり、日頃から生徒の思いや意図を引き出す場を設け、適切な指導や助言が行われていることがうかがえました。こうした積み重ねが、生徒の主体性や表現への意欲を高める基盤となっていると思います。生徒の思いや意図を実際の表現へと結び付けるためには、技能の習得も欠かせません。生徒の思いがより豊かに形となるよう、今後も日々の授業の中で着実に身に付けていく必要があると感じました。

今年度の取組を通して、指導と評価の一体化を考えることは、生徒の学びそのものを豊かにし、授業の質を高めるための重要な視点であると感じています。今後も、生徒の実態を的確に捉えながら、評価の結果を授業改善に生かし、学びの質を高める循環をつくっていくことが求められます。指導と評価の一体化を継続的に追究し、生徒一人一人が自分の表現に自信をもち、学びの喜びを実感できる授業づくりを進めていきたいと考えます。

（小・大谷中）

第69回 研究大会報告

幅広い音楽活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、
生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わる資質・能力を育成するにはどうすればよいか。
— 授業改善のための「指導と評価の一体化」 —

東 部 地 区

(富・呉羽中)

炭元恵梨子教諭が、混声三部合唱「輝くために」を教材とし、「曲のサビをもっと盛り上げるためには、中間部分をどのように表現したらよieldろうか」という学習課題の下、第2学年で授業を行った。今回はテクスチュア、強弱、構成を意識して中間部分の音楽表現の工夫をねらいとした授業であった。

まずは、前時の録音を聴くところからはじめ、生徒は演奏の課題として感じ取った中間部分について、パートごとにどのように表現したらよいか話し合った。生徒は、実際に歌いながら互いの思いや意図を伝え合い、様々な表現方法を試す活動に取り組んだ。全体指導では、中間部分を敢えてユニゾンで歌ったり、ピアノ伴奏をアルペジオから和音のみに変更して歌ったりするなど、表現方法の違いを感じ取る場面も設定した。

協議会では、特に授業の導入について、「既習曲を生かしてパートの役割等の学びを引き出せるとよい」「録音を聴いて生徒がつぶやいた言葉を音楽に関する用語に置き換えることで、より掘り下げる時間を大切にしたらよかったのではないか」「拡大楽譜の付箋に書き表された生徒の思いを生かすとよかったのではないか」等の意見が出された。

三輪憲治指導主事からは、「生徒が『こんなふうに歌いたいという思い』と、その実現に向けて『こういう歌い方で歌ってみようという意図』をもち、生徒と教師が学びのゴールの姿を共有することが大切である」と助言をいただいた。

田村 諭士 (中・舟橋中)



西 部 地 区

(射・射北中)

『さくらさくら』に対する自分のイメージをもって、箏で表現の工夫をしよう」という学習課題の下、飯田雅也教諭が第2学年で授業を行った。今回の研究授業は、器楽分野の中でも箏の学習における「指導と評価の一体化」が図られるよう意識して取り組んだ実践であった。

生徒がワークシートに記述した演奏イメージを具現化できるように、一人一面の箏を準備し、試行錯誤の時間が十分に確保されていた。特にICTの活用においては、器楽分野における音楽の楽しみ方の幅を広げる実践であった。教員による適切なフィードバックや奏法ヒント動画の配信は、生徒の表現意図を具体的な音へと結び付ける一助となっていた。また、タブレットを用いた相互評価や、録画による学習の蓄積や振り返り等、主体的な学びを支えるICTの活用が極めて効果的に機能していた。

部会協議では、和楽器を扱った本時の「指導と評価の一体化」について話し合った。生徒のワークシートに記述された表現意図と、実際の音に関連させた評価基準の在り方や、ICTを用いた効果的な振り返り方法について、各校の取組を共有するなど学びを深めた。

小川真紀子指導主事からは、「歌詞に沿ったイメージの想起や、桜の画像、教師の演奏を効果的に活用する手立てが講じられていた」「生徒が意図的に音色を変化させることに注目できるようにする声かけや、教師が箏を演奏し、よりよい音色を生徒に実感させることが、技術向上と表現の深化につながる」「音楽を形づくっている要素である『音色』『速度』『間』についての生徒の思いや意図と技能の評価を関連付けて考えていた点は、指導と評価の一体化の観点から重要である」と助言をいただいた。

河邊真美子 (小・石動中)